歴史探訪

|第16回|

歴史の陰に忍者あり

忍者の実態を解明する!!

はしがき

最近外国人旅行者の間では日本文化ブームである。先日、私は忍者の里として名の通る伊賀・甲賀（正式にはコウカと呼ぶ）を訪ねた。驚いたことにそこには外国人観光客がバスを連ねて来ていた。たまたま居合わせた私はいろいろな質問攻めにあい、いつのまにか即席の学芸員になっていた。日本文化といっても能、禅、歌舞伎、茶、生け花、小唄等々多種多様である。

欧州に限らず、どこの国の人も自国の伝統ある文化については自らの蘊蓄を持っていて、他国の人の質問に対して自らの見解を披露する。ところが日本の場合、そうした伝統文化が日常生活から離れたところにあるために、外国人の強い関心を満足させられるような返答ができる人が少ない。これはひとつには幕末から明治維新を経て現代に至るまでの急速な風土の欧風化、近代化が影響している。

先日、私の若い知人が商談のため欧州の古い歴史のある街に赴いた。彼は商談が円滑に進むよう相手国の文化についていろいろ勉強して出かけた。ところが相手は逆に日本の伝統文化について質問を浴びせかけてきた。その若い知人はうまく答えられず、すっかり恥をかいてしまったという。

今や「忍者」は「ニンジャ」という世界語になっている。このたびは世界語「ニンジャ」について述べていきたい。

▲忍者屋敷 甲賀望月出雲守屋敷（筆者撮影）

1 忍者という言葉

忍者と聞けば、読者の方々は黒い装束を身にまとい、巻物をくわえてひらりと空へ舞い上がったり、ドロンと煙と共に消え失せたりと映画やマンガなどに描かれるような人間離れした術を使う者というイメージが強いだろう。そういった夢をぶち壊すことは筆者としても忍びないが、実際の忍者はこのような事はできない。いくら身体能力を鍛えたとしても所詮人間にできる訳がないのだ。けれども鍛錬することにより、例えば長距離を短時間で歩くことが可能になったり、軽い身のこなし方を身につけ、目的とした屋敷に潜りこみ目的を達して素早く逃げたりすることなどはできたであろう。これは身体能力を高めることで可能になる。これらも忍術というジャンルであろう。ここでは忍者の真実の実態を少しでもお伝えできたらと思う次第である。

ところで「忍者」という言葉がいつ頃から言われ出したかといえば、昭和30年頃に創られた造語である。昔には無かった呼び名である。これは小説家 山田風太郎の小説「くノ一忍法帖」・「甲賀忍法帖」等々において彼が創りだした造語である。これらの小説が大ベストセラーとなったため「忍者」という言葉が世間一般に広まり定着した。それ以前においては忍者のことを「草」・「細作」・「志能便」・「透波」・「突波」・「乱ぱ」等々地域によって呼び方は違っていた。同じく「く

ノ一」も女性忍者の代名詞として定着しているが、これも風太郎の創作小説で使われた当て字からきている。「女」の文字を分解して「くノ一」と小説に用いた、風太郎の一流のユーモアである。昔は女性のことを「女（おんな）」と生々しく呼ばなかったのだが、風太郎が生きた時代以降は女という言い方を普通に使っていたので、より説得力を持ち合わせていたのだろう。

女性忍者は、男性忍者と同じ装束で立ち回りなどはしない。当然女性ならではの立場・特質・特技を活かした活動をしていた。

また「透波（すっぱ）」又は「素波（すっぱ）」という言葉は現代でも週刊誌などでよく使われている。スキャンダルを「スッパ抜く」というように、人の隠し事を暴露するときに「スッパ」という言葉が使われるが、その語源は忍者用語からきている。

戦国時代、それぞれ各地の武将は忍者のことを下記のようなさまざまな呼び方をしていた。たとえば、

・北条氏康（関東）…風魔党（ふうまとう）
・尼子経久（山陰）…鉢屋衆（はちやしゅう）
・毛利元就（中国）…座頭衆（ざとうしゅう）・世鬼一族（せきいちぞく）
・武田信玄（山梨）…三ツ者（みつもの）
・上杉謙信（越後）…軒猿（のきざる）
・織田信長（尾張）…饗談（きょうだん）・川並衆（かわなみしゅう）
・徳川家康（三河）…甲賀衆（こうがしゅう）・伊賀衆（いがしゅう）
・伊達政宗（仙台）…黒脛巾組（くろはばきくみ）　等々

従って、昔にタイムスリップして当時の人々に忍者と言っても通じないであろう。けれども本文では現代において一般化している呼び名である忍者という言葉を使うこととする。

2 忍者の役割

忍者がもっとも活躍したのは、全国で大名が互いに覇権を争っていた戦国時代である。16世紀頃は、在地領主が中央権力（朝廷・公家・寺社等）の荘園の利権を無視し、土地を排他的に支配するようになっていった。そこで忍者は、正に影の存在で、親・兄弟にも自分が忍者ということを秘匿（ひとく）した。また身分は今でいう民間零細個人事業主的なもので、かつ必要な時だけ使われる傭兵であり、給料制ではなく成功報酬制であった。以前ある番組で“死して屍（しかばね）拾うものなし”というキャッチコピーが使われていたが、正にそういう存在であった。

忍者の任務としては、諜報（ちょうほう）・防諜（ぼうちょう）・謀略（ぼうりゃく）・非正規戦闘等がある。

では忍者と剣術士との違いは何であろうか。剣術士は、敵に出くわした時は武士道の精神により試合を受け勝負するものである。これに対して忍者は決して戦わないのを大原則とする。ひたすら逃げて逃げて逃げまくるのである。そのために忍者道具があるといっても過言ではない。忍者道具は、あくまで追手の足を遅らせ逃げきるための道具なのである。攻撃を仕掛けるための物ではない。どんな手を使ってでも生還し、雇主に掴んだ情報を伝えることが最大の任務であった。彼らは情報という成果を伝えてこそ、初めて報酬がもらえる傭兵だったからである。結果を出して“なんぼ”の世界であったのである。

以下、それぞれの任務について解説をしていきたい。

・諜報（ちょうほう）

敵の国、城、砦などに潜入し、その国の政治状況、家臣の主君への忠誠度合、動員可能兵力、食糧の備蓄状況等々あらゆる情報を調べ上げることである。

・防諜（ぼうちょう）

重要事項の情報漏えいを監視し、敵の忍者に情報を掴ませない役割のことである。敵方の忍者の行動パターンがわかるのも、自らが同じ思考パターンを持つゆえである。

・謀略（ぼうりゃく）

偽りの情報を流したり、それが敵の忍者や重臣に、それとなく伝わるように仕組んだりして敵の判断と行動を狂わせること。

・非正規戦闘

いわゆるゲリラ戦。敵の城内に忍び込み城に火をかけたり、裏門を開錠して味方の突入を援（たす）けたり、敵が思いもよらぬ時間帯や場所から攻撃を仕掛けたり、暗殺もした。古文書などに頻繁に突然の病死などと書かれていても、実は暗殺であり毒殺であるケースは多々ある。

女忍者「九ノ一」は男忍者とは違い、立ち回りなどはせず女性ならではの立場・特質・特技を活かした活動をした。彼女らの任務は情報収集が主である。目的とする屋敷に下女や女中として入り込み、働きながら普段見聞きする情報を収集することにあった。男忍者は小間物屋・かんざし売り・呉服屋等々としてその屋敷に現れ、

怪しまれないように情報を受け取る連携プレーをしていた。

戦国時代では男は土地に縛られていたが、女はほぼ自由に移動できた。人別帳にも記載されないため、遊女、人形使い、白拍子等々に成りすましてあらゆる場所に行くことができた。現代では「九ノ一」は、「色仕掛けで任務を遂行した」というイメージをもつ人も多いが、それらは後世のフィクションによって創られたイメージである。

忍術秘伝書である『万川集海』・『忍秘伝』・『正忍記』をはじめとする九ノ一に関する史料には、色仕掛けによる忍術に関する記述や術は一切記載されていない。これは、山田風太郎の創作小説のみに存在したものである。

そして、我々がイメージしている黒や柿色の忍者装束は、夜間に目的とする屋敷や砦に忍びこむ時にのみ使用された。それ以外は、虚無僧、僧侶、放下師（旅芸人）、山伏、猿楽師等々、任務遂行に適した装束に変装して探索や情報収集をした。

忍者道具は、日頃農民が使う鎌や穴掘りに使用した苦無などが主であった。小説などに出てくる忍者が常用する手裏剣は、鉄を加工し鋳造するため高価で、かつ重いため身軽に動くことができなくなる。また持っていることが知れると怪しまれることから、あまり使用されなかったのが実態である。忍者イコール手裏剣というイメージは後世に映画や小説が創り膨らませた虚像である。忍者道具はあくまで逃げおおせるためのものである。自ら攻撃を加えるものでは決してない。

忍者が使用した武器を少し紹介したい（イラスト参照）。

3 忍術秘伝書

忍者が用いた道具や術などを記した書物のこと。しかし、忍術を書き記すことは敵に手の内を晒すことになるので、口伝すなわち口頭で伝えることが基本中の基本であった。現代に残されている忍術書は、江戸時代の平和な世に書かれたものが多い。その背景には、江戸幕府の幕藩体制が強固に機能したことにより、各大名は情報を得て互いに戦う必要がなくなった。よって忍術の活かせる機会は減少し門番や城周辺の警備や空き家になった武家屋敷の管理等に役目替えとなった。こうなると忍者も忍術を磨く鍛錬を疎かにする傾向となり、廃れる前に実在した忍術を後世に残す必要性があったからであろう。

・万川集海

伊賀忍者、藤林保武が1676年の江戸時代に著したもの。全22巻からなる忍者のバイブル的存在である。

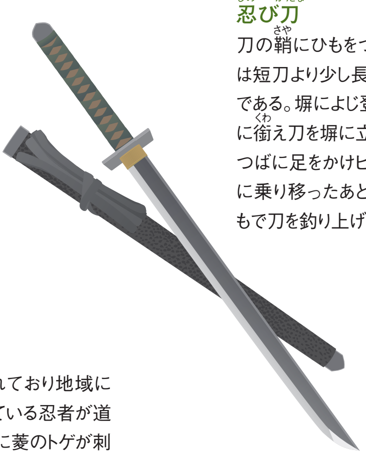
・忍秘伝

1650年以降から1730年頃に、岡山藩のお抱えの伊賀者が著したもの。4巻からなり、伊賀・甲賀伝記、忍道具秘法、独自の忍術を伝えている。

・正忍記

徳川御三家の一つ紀州藩に伝わる紀州軍学で1681年に編纂された忍術秘伝書である。著者は藤一水子正武で、万川集海とは一線を画した

忍者が使用した武器

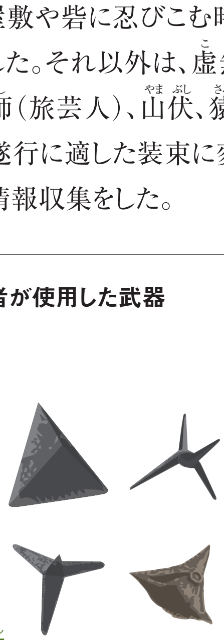


忍び刀

刀の鞘にひもをつけた刀で、長さは短刀より少し長い真っ直ぐな刀である。塀によじ登る時、ひもを口に銜え刀を塀に立て掛けて、刀のつばに足をかけヒョイと壁瓦の上に乗り移ったあと、口に銜えたひもで刀を釣り上げて使った。

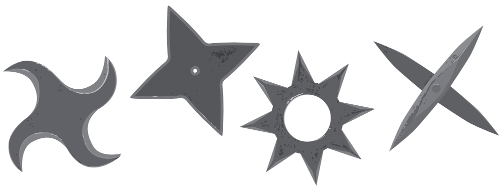
鉄拳

敵と組合いになった時、敵の目や腕、足等に強いダメージを与えるために使用した。



撒菱

追手の足止めに使った。菱の実で作られており地域によっていろいろな形状をしている。追われている忍者が道にばらまき、草鞋で追ってくる敵の足の裏に菱のトゲが刺さって足が止まったその隙に逃げるためのものである。



手裏剣

地域、流派により形状はまちまちである。重いため自分の動きが遅くなる。またよく鍛錬をしないとまっすぐ飛ばない。鋳造が大変難しく高価であったため、フィクションドラマではよく使われているが、持たない忍者が多かった。

紀州独自の忍術書で新楠流とも呼ばれている。序巻、初巻、中巻、下巻から構成されている。

以上が忍術三大秘伝書である。

江戸時代になり平和な時代になると、忍者の活躍する場が無くなり、現代でいう派遣社員的立場であった忍者は大失業時代を迎えた。そうなると忍者自身も必然的に鍛錬も疎かになり、忍術の口伝も無くなりかけた。そういった危機感から、後世の人々に極めた術を秘伝書として残そうと試みたのである。

また、滅亡した大名に雇われていた忍者が江戸初期に失業したため盗賊に成り下がり、風魔小太郎のように江戸の治安を脅かす悪の頭領なども出現した。悪党盗賊と忍者は忍術を使うことにおいては同じである。悪党盗賊は商家や大名屋敷から金品を強奪するために忍術を使った。これに比して忍者は、雇用主の必要とする情報を得るために忍術を使う。これには表裏一体の面がある。また、忍術秘伝書を著したもう一つの理由は、より忍術を活かせる仕事への役目替えを願い出る意図もあったといわれている。

忍術秘伝書のタイトルから脱線するが、松平 健主演のテレビドラマ「暴れん坊将軍」にも登場する御庭番は、伊賀・甲賀忍者ではなく紀州忍者（伊賀忍者の分派で新楠流）である。

7代家継の時、徳川の直系が途絶えたため、慣例により御三家（尾張・紀伊・水戸）から将軍を選ぶこととなった。この時、家康からみて血の濃さで（曽祖父にあたり家康から四代目）紀州藩主徳川吉宗が8代将軍に就任した。御三家筆頭の尾張家は、五代目の高祖父の代になっていたので、吉宗より一代血筋が遠く、ゆえに将軍にはなれなかったのである。

将軍となった吉宗は、使いやすい紀州藩士を300名ほど引き連れて幕府に乗り込んだ。そして側近は紀州藩士で固めた。その時に御庭番という役職を創設し、信頼のおける紀州忍者を探索・情報集め等々に用いた。しかしながら家康以来の伊賀・甲賀忍者の末裔は、側近としてはまったく使われなかったのである。御庭番は将軍吉宗の身辺警護を行ない、将軍の身近に居て各大名の動向、内情を探るよう直接に指示を受ける立場にあった。ゆえに公儀隠密は伊賀・甲賀忍者ではなく紀州忍者・紀州出身の剣豪が用いられた。

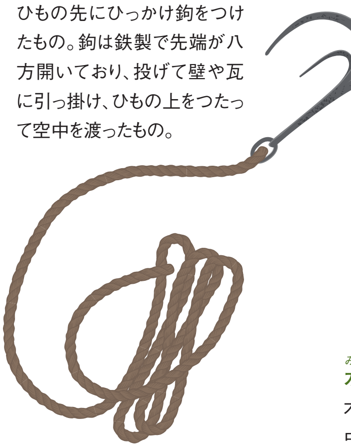
4 甲賀忍者の歴史

甲賀地方は地理的には東海道が通り、交通の要所である宿場町（甲賀市水口）として栄えていた。ここに今も元禄年間に建てられ、昔の忍者屋敷の防御建築が見られる建物が保存公開されている。それが甲賀望月出雲守本家である。甲賀は「こうか」と読むが、「こうが」と誤った読み方をされることも多い。

甲賀忍者は、滋賀県甲賀市（こうかし）、湖南市を本拠としていた。伊賀とは山一つ隔てた隣同志であり、対立関係はなく

打鉤（うちかぎ）

ひもの先にひっかけ鉤をつけたもの。鉤は鉄製で先端が八方開いており、投げて壁や瓦に引っ掛け、ひもの上をつたって空中を渡ったもの。

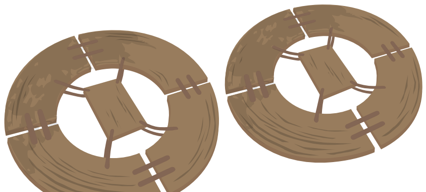


苦無（くない）

ふだん穴を掘る時に使っていたものを武器として使用した。棒手裏剣は重量が一点にかかるため威力があった。また楔（くさび）代わりに差し込むのにも使用した。

鎖鎌（くさりかま）

鎌と重りとなる分銅を鎖で結んだ武器。相手が踏み込んできたら遠心力のついた分銅で攻撃のタイミングを外し、鎌で攻撃する。また、鎖で相手の首を絞めたりもできる。



水蜘蛛（みずくも）

木を円形に加工し、今でいう浮輪の形をしたもので、敵の水堀を渡るときに中心に座って使用したとされるが、現実的でなくまず使用されなかった。

昔から交流が盛んで、甲賀・伊賀相互間で婚姻も行われていた。この甲賀忍者を有名にしたのは「鈎の陣」である。

1487年、室町幕府の9代将軍足利義尚の時、近江の守護 佐々木六角氏が台頭して幕府の命令に従わなくなったため、軍勢を集めて六角氏を討伐しようとした。六角高頼は戦いを避けて、本拠地観音寺城を放棄して甲賀郡中惣に逃げ込んだ。

この時、足利義尚が布陣したのが、鈎と呼ばれる土地（現在の栗東市）であった。この戦いで、甲賀古士（在地国衆といわれる武士である）が、我々が今イメージする忍者のごときゲリラ戦を繰り広げ、数倍からなる幕府軍を苦しめ退却させたことが甲賀古士（武士）の名声を高めたのである。

その後、六角氏は伊賀・甲賀の自治を認め領主支配をしなかったので、伊賀・甲賀は平穏な生活を取り戻した。しかし織田信長と豊臣秀吉は、京にも大坂にも近いこの地を直轄領として支配するために、今まで在地国衆が行ってきた自治を否定し攻撃を加えてきたのである。これが有名な天正伊賀の乱の興りであった。

信長自ら指揮をとった第二次天正伊賀の乱では、伊賀・甲賀衆三千に対し四万もの大軍を送り込み伊賀・甲賀地方を残虐に蹂躙した。その後、豊臣秀吉は伊賀・甲賀の国衆の支配地を取り上げ改易処分にした。この戦闘集団をうまく取り入れたのが徳川家康であった。彼はある程度の自治を認め、天下を獲得した後は、腹心藤堂高虎に津の領国に加えて飛び地となる伊賀上野の地を与えて緩い監視をさせた。天下を獲るまでは、伊賀・甲賀の国衆（外敵から自治を守るため忍術と言う技を磨いていた）を味方にしておく必要があったのである。

伊賀・甲賀忍者も家康の求めに応えるべく、各種の合戦において諜報活動等に大きな貢献をした。家康も各大名の動向等情報収集に甲賀・伊賀忍者をうまく活用した。しかし、江戸幕府が開府され徳川幕藩体制が盤石になると、大名同志の争いができなくなり各大名にとって諜報活動は必要ではあるが重要性においてはかなり低下した。よって忍術を必要としない

▲上野城（筆者撮影）

大手門の警護や武家屋敷の空き家の管理などの任務を命じられた。大名も忍者をリストラしなければならなくなったため、その末裔は次第に鍛錬において疎かになり忍術という技が廃れていくことになったのである。

5 伊賀忍者の歴史

伊賀忍者は、徳川家康が天下を獲ったため一躍メジャーに伸し上がった。伊賀が徳川家康に臣従したのは甲賀より遅い。1582年、織田信長が明智光秀の謀反により京都本能寺で殺された。その時家康は、信長の接待を受けて数名の家臣のみで堺見物をしていた。明智光秀は信長の有力な同盟者であった家康を殺そうとした。家康は本拠地岡崎に帰ろうにも主要街道は明智の兵で抑えられており、死を覚悟するほどの大ピンチを迎えた。どの道を通って本拠地岡崎に帰還できるかが最大の課題であった。主要街道を封じられていたため、険しい伊賀の山を越えてゆくしかない情勢にあった。だがこの道は落ち武者狩りや山賊が出没する危険極まりないけもの道であった。

この状況を救ったのが服部半蔵正成である。ここで断っておくが、服部半蔵は今でいう苗字のようなもので、代々服部半蔵○○と名乗った。よって服部半蔵は何人も存在したのである。この時有名になったのは、服部半蔵保長の息子、服部半蔵正成である。正成は三河生まれの三河武士であり、忍者ではない。家康二十四将の一人

として、二十四将を描いた巻物にも描かれている。

伊賀の国では北は藤林家、中央は服部家、南は百地家が国衆として支配していた。これを御三家といい、お互い姻戚関係で結ばれていた。この家康の「伊賀越え」の時には服部半蔵正成は随行しておらず三河にいた。現に家康に随行していた武田信玄の姻戚筋の穴山梅雪は家康と別れたため、この落武者狩りに遭遇し惨殺されている。この報告を受け正成はすぐに動いた。服部半蔵正成は、親戚筋の前記の伊賀国衆御三家に救いを求めたのである。その御三家はこれに応じて伊賀国衆の下人二百人程の体制で、家康を山賊や野盗や落武者狩りから護衛することに成功したのである。ここでもし家康が落ち武者等に殺されていたら、その後の日本の歴史は大きく変わっていたであろう。

その後、家康は服部半蔵正成にこの功績を賞して、忍者の仕切を任せたのでいっそう忍者の頭領としてその名は広まった。1596年に服部半蔵正成は病死。その子、服部半蔵正就が伊賀越えの功名により八千石を賜ったのである。

在地伊賀忍者は皆、服部半蔵家の支配下に置かれたのではなく、将軍様に直属しているという認識でいた。現に家康の伊賀越えは在地伊賀・甲賀が身を張って遂行したものであり、服部半蔵正成に協力したという認識であった。よって服部半蔵家から褒美をいただけるものと思っていた。だがこの功名を正就は独り占めしたのである。そこで、在地忍者や江戸に家康と伴に下った江戸の伊賀忍者などが、服部半蔵正就に対して江戸初期に反乱をおこした。結局、幕府は服部半蔵家に対して、監督不行き届きとして家禄没収処分を下したのである。

6 忍薬

薬は特に甲賀忍者がよく使用した。伊賀・甲賀地方は昔から山に囲まれていたので薬草が豊富に自生していた。ゆえに薬草の効能などを熟知していたのである。荷物をできるだけ減らしたい忍者にとって、携帯食糧は必須であった。忍術秘伝書に記されている食糧と武器の一つとして使われた毒薬を紹介しておく。

【食糧】

・水喝丸

梅肉4、氷砂糖2、麦角1の比率で混ぜ合わせて、乾燥させたもの。酸っぱいが、砂糖が入っているので舐めると一時的に唾液が出て、喉の渇きを防ぐことができた。

・飢渇丸

人参150グラム、そば粉300グラム、山芋300グラム、耳草15グラム、はと麦15グラム、米ぬか300グラムを混ぜて、日本酒5リットルに3年漬ける。乾いたら2センチほどの団子にする。これを3粒食べるだけで一日分の栄養が摂れる。

【毒薬】

・石見銀山

主成分は亜吡酸で、ヒ素を多く含んでおりこの亜吡酸と化合することで消化器に下痢、嘔吐、神経に異常をきたす。

・座枯らし

青い梅には、アミグダミンという青酸化合物が含まれている。少量で死に至る。

・宿茶の毒

濃く入れた玉露を竹筒に入れて地面に埋め、1ヶ月放置する。これを毎日2滴ずつ飲ませると、1ヶ月程で病気になり2ヶ月で確実に死ぬ。

・眠り薬

麻の実を陰干しして粉にして煎じて飲むと、2杯で熟眠する。麻には、麻薬成分が含まれるので、眠気と神経麻痺を併発する。

・眠りの煙

イモリとモグラと蛇の血を混ぜて、紙に染みこませる。この紙に火をつけ煙を吸わせると眠り込む効果がある。

伊賀・甲賀地方には薬草が自生しており、古くから漢方の知識が豊富であった。この他にも怪我、内臓等々に効く漢方薬の知識が役に立ったのである。歴史書をひも解くと、タイミングよく人が死んでいることに気づくが、こうしたときは暗殺の場合が多いと思われる。このような証明ができない死の場面には、忍者が大きく関わっていた可能性が高いと思われる。**"歴史の陰に忍者あり"**である。

また機会があれば、忍者は戦国の世をどう生き抜き歴史を動かしたかにふれたい。

参考図書
「忍者」 川上 仁一監修 日東書院
「図解 忍者」山北 篤著 新紀元社

（2017.8.21）
OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫